

優秀賞

テーマ：医療と福祉、わたしの体験
「綺麗事の、その先」

東京都・学習院女子高等科1年 小鷹愛奈

私の祖母、のんのんは認知症だ。

幼いころから私はほとんど毎日家に遊びに行った。「世界一ののんのが好き」。これが私の口癖で、ずっとそばを離れなかった。のんのんはいつも笑顔でおしゃれしておでかけすることが好きで「愛奈ちゃん、早く大きくなって一緒におしゃれしておでかけしよう」とよく言っていた。私もその日を楽しみにしていたし、いつか当たり前にその日は来ると思っていた。

けれど私が小学3年生になったぐらいのころから様子が少しずつ変わり始めてしまった。同じことを何度も聞いたり、物を移動させてしまったり、大好きだったおしゃれもなくなったり。被害妄想をするようになり、家族に当たることが増えた。私も対応が面倒で「同じこと聞かないでよ」と何度も言った。症状はどんどんひどくなり、一人で暮らすことが危うくなってしまった。徘徊して何時間も搜索するということもあった。病気は進行していると強く感じたのもそのころからだった。

私の中3になった時、のんのんは施設に入った。最初のころは母と一緒に会いに行っていたが、次第に私は会いに行かなくなった。会いに行っても何を話せば良いのか分からず、隣に座るだけで時間が過ぎるのを待っていた。それでも帰りの車の中では毎回、のんのんのことを考え、落ち込んで泣いた。会う度に変わっていくことを現実と認めたくなかった。できないことが明らかに増えていった。けれど翌日にはそんなことは忘れて、いつも通り生活を送ってしまう。そういう自分も嫌だった。暇がないから行けないと言い訳してのんのんを遠ざけた。のんのんはいつ私のことを忘れてしまうか分からない。そう思うと会いに行くことが怖くなり、行くことができなかった。母には「自

分ののんのんとの思い出を覚えてあげていたらいいのよ」と言われたが、それは綺麗事だと思った。大好きな人に忘れられて平気な人はいないだろう。

7月下旬、私は何カ月ぶりかのにのんに会いに行った。スタッフの方に「あの子はだれ？」と聞いていた。もう私のことを忘れたのだ。覚悟はしていたがやはり悲しかったし、認めたくなかった。私の大好きなのんのんの中に私はいない。涙がこぼれそうになるのを必死でこらえた。目を合わせるができなかった。いつかこの日が来ることを理解していたつもりだったが、どこかで私のことは忘れずにいてくれるのではないかと期待していた。

帰り際、母がスタッフの方に近況を尋ねていたのを隣で聞いた。最後にその方が私に「今では病気のせいで自分一人でできることが少なくなってしまったけれど、とても優しいから私達スタッフのことを気遣ってお手伝いしてくれたりするし、いつも笑顔よ」とおっしゃった。帰りの車の中、忘れられてしまった悲しさで涙がずっと止まらなかった。けれどスタッフの方のお話で、のんのんが私のことが分からなくても「いらっしやい」と迎えてくれたり、私が話すことを笑って聞いてくれることを思い出し、少しのうれしさもあった。たくさんのことやを忘れたとしても、ずっと変わらないことはあるのだと思った。同時に今まで忘れられるのを怖がって、何だかんだと理由をつけて会いに行かなかったすべての時間を後悔した。

人生はそれがどのようなものであろうと、たった一度限りのものだ。のんのんはその日あった出来事すら30分も経てば忘れてしまう。できることなら、一緒にお買い物に行ったり、お食事したり、おしゃべりしたり、思い出を忘れずにいてほしい。けれどそれが難しいなら、せめて一緒に過ごすすべての瞬間がのんのんにとって幸せを感じるものであってほしいと思う。だから今度また、のんのんに会いに行きた時はたくさんおしゃべりして笑顔が見られるようにしたい。

思い出は、私が全部覚えていくよ。